



「こながい」の「こ」

小長井小には「こ・な・が・い」を頭文字にして子どもたちに意識づけをしていることがあります。「こ」は「ことば」、「な」は「なかま」、「が」は「がんばり」、「い」は「いきいき」です。これらは子どもたちが自分の成長の物差しとして、校長の話をするたびに取り入れています。

さて今回は、「こ」（ことば）について紙面を割きます。子どもたちの日常的に使っている言葉の中に「うざい」「だまれ」「くんな」「あっち行け」など、心ない言葉を耳にされることはないでしょうか。親しい間柄でもグサリと突き刺さる言葉を口にしている、文字として書いている場面がないでしょうか。

おそらく、本人はさほど気にせず口にしたり書いたりしている場合が多く、時としてそれすら忘れていることもあります。しかし、言われた方、書かれた方はどうでしょうか。

「子どものしていることだから」ではなく、子どもだからこそ「ことば」の大切さを学ばせないといけないと思います。

また、私たちは言葉を誕生以来習得して成長していきます。それは日本であれば日本語という言語をある程度は自然と身につけ、日本独特の方言を習得しています。

であれば、「言葉づかい」についても同様のことが言えるのではないのでしょうか。激しい言葉づかいの環境、やわらかい言葉づかいの環境、メディア漬けの環境等々、子どもたちが育った環境は子どもの「言葉づかい」に多少なりとも影響を与えていないのでしょうか。

しかし、どのような言葉の環境であっても、子どもたちが社会に出て人と交わるようになれば、自分の言葉づかいだけでは通用しなくなります。例えば激しい言葉づかいは自分が意図せず相手を傷つけてしまう、乱暴な人という印象を相手に与えてしまいかねます。

学校は子どもたちが初めて出会う社会です。ですから社会での言葉づかいが必要になります。家と同じ感覚の言葉づかいは通用しない場面が増えてきます。

「嫌なことを言われた」というのは、子どもどうしのトラブルで上位に入ります。相手を思う、慮る言葉づかいについての指導は、学校・家庭の両面からと思います。